

■ 令和3年度 第1回 新潟市介護人材確保対策協議会

---

日 時： 令和3年8月27日（金）午前10時から

場 所： オンライン開催（Zoom）

出席者： 新潟市介護人材確保対策協議会 国兼委員、高橋委員、丸田委員、笠巻委員、山田委員、渡邊（敏）委員、渡邊（弘）委員

事務局： 本間高齢者支援課長、岡村高齢者支援課長補佐、羽下主事

---

1 開会

欠席委員：坂上委員、宮崎委員

2 確認事項

3 議事

（事務局）

事務局より議事1説明

（丸田会長）

介護サービス事業所の代表者の方もいらっしゃいますので、事業者の取り組みとして、現時点での課題等ありましたらご意見をいただきたいと思います。私から指名させていただきますので、順番にご発言をいただきたいと思います。

まず、県老人福祉施設協議会の笠巻委員、今、課題がどのようなものがあるのか私たちに教えていただけませんか。

（笠巻委員）

いつもお世話になっています。笠巻です。当法人では、皆さんからも今ほどありましたけれども、やはりコロナ禍なので、いろいろな制約があります。就職に関しても見学会、それ

から実習生の受け入れも制限を受けながら粛々と行っているところではあります。

お陰様で採用試験は3回実施しまして、相当数の採用をさせていただいているところではあります。いろいろなところで県外でも感染がかなり多くなっているのので、出掛けることがほとんどこちらでもできない。職域での研修もほぼウェブになっているということですので、そういったことで懸念していることは福祉に対する興味が薄れないかなということと、やはり膝詰めでやるということは大事なことで「百聞は一見にしかず」ですので、画面で見るとより直接見た方がやはり本当はいいのだろうなということをつくづく思っていて、ただ今度は老施協の話になりますけれども、老施協でもコロナが収まっても研修については、人と時間の問題、それから県の縦長の特性から、おそらくコロナが収まっても集合研修プラスウェブ研修の併用という形がいちばん現実的だろうという中で、以前の会議でも出ていましたけれども、福祉に対しても興味を持ってもらうということでのアプローチの仕方、いわゆるウェブや動画を使っただけのアプローチの仕方というものは考えていく必要があると思っています。

(丸田会長)

ありがとうございました。

続きまして、中蒲原福祉会の国兼委員からご発言をお願いいたします。

(国兼委員)

よろしく申し上げます。当法人は、毎年10名から15名、新規事業ある、なしに関係なく採用の計画をここ5年ほど立てていますが、14、5名に合格者が達したことがまずございません。10名合格者が出ればいいのかとといったところで、現状、毎年3月から職場説明会というところで最低週1回開催しますよということで学生にアプローチして参加していただいて、大体参加していただいた方は第1回目の6月の試験には参加していただいている状態なのですが、今年度は今まで16名受験していただきまして、合格者が9名、申し訳ないのですが、不合格者が3名で、4名の方が辞退されると。毎年大体4名から6名、申し訳ないのですが大学の学生さんが行政関係の内定が出るまで時間があるということで、辞退が出るということで、その辺は非常に我々にとっても4、5名の辞退というものは非常に大きく、私どもの努力が足りないのかなと思っていますけれども、今のところ9名なので、もう2、3名、今年度の目標ということで、ただまだエントリーが2名ほどなので、目標までいくかどうかは分かりませんが、なんとか学生さんに魅力がある法人だよということをアピールしているところと、丸田先生の大学をはじめ、先輩の職員から中蒲原福祉会は

こういういいところもあるよということで、宣伝していただければということもあるのですけれども、なかなか目標の合格者が出ないということが現状でございます。

(丸田会長)

具体的な現状をお知らせいただきました。ありがとうございました。

引き続いて、渡邊委員にお願いしたいのですが、事業所のお立場でもあり、なおかつ分科会の副会長というお立場でもありますので、両面の立場からご意見がありましたらお願いいたします。

(渡邊委員)

渡邊です。今ほど丸田先生の方から言われた言葉が非常に重たいのですけれども、両面からということでお役に立てずに申し訳ないかなと思っています。

事業所の立場からということで、現状をお伝えしたいと思います。昨年度は、コロナの影響で実習生の受け入れを、大学や専門学校の皆さんには本当に申し訳なかったのですが、お断りするということが多かったのですけれども、今年度は学校側と感染対策を進めながら実習生は通常どおり受け入れております。

皆さんから採用の話がありましたが、当法人では、児童の方でもともと募集がゼロだったり、若干1名か2名ほしいかなという年があったりという感じです。障がいの方も毎年、3名、4名くらいの募集はかけております。介護の方も2名、若干名ということで募集はかけているのですけれども、昨年度、一昨年に随分職員数を、現場が厳しくて増やしたものですから、今年度は採用をゼロにしてスタートしたのですが、なかなかパートさんは子育て、お孫さん等、介護をする年代に入ってきたりして、バタバタと非正規の方たちの離職が出たものですから、現状、非常に厳しい状況になっています。来年度の春の新卒採用のかたは、今年はずごく痛い思いをしましたので、若干名と募集させていただいたのですが、とても優秀な学生さんたちが集まりましたので、予定していた人数の2倍を採用したという形になっています。4名ほど介護で採用しております。障がいの方は1名ほどだったかと思います。

今、現状として困っていることは、現場でコロナ禍の中で、職員のストレスというものが非常に大きくて、感染予防に努める中で、高齢者の私たちみたいな事業と、あとは一般社会、また児童・障がいの方との温度差を非常に感じていまして、私たちは感染対策について非常に厳しくやっているのですけれども、後手後手で後からどここの子どもさんが陽性だったとか、事業所がどうだったとか、そういうことがあって、非常に辛いなということと、利用者さんを入所施設に入れてしまうと、もうイコール死につながっていくということで、

非常にみんな危機感を持って仕事をしているので、少しでも体調が悪いと職員には休んでもらったり、ご家族でも熱が出たり、風邪症状があったら休んでもらったりという形をしていますので、常に職員がいない状態があります。ただ、その分、みんな安心して働いているのかなということは感じています。早くコロナが収束してほしいなと思います。

あとは処遇改善の所得のところの数字を見させていただいて、ああそうなのだと思ったのですが、うちの法人は 63.3 パーセントで、特定はとっておりません。理由としては、やはりみんな介護職からスタートして経験を積んで、自分で勉強して介護支援専門員なり社会福祉士なりを取って、責任が重くなっていく中、どうしても介護職の方が給料がいいので、そこで少し差が出るというところで、国も考えてはくれましたけれども、なかなかそこに見合った金額には上がらないというところです。なので、まだ特定の方は受け入れていない状況です。

以上です。

(丸田会長)

分かりました。養成校、それから事業者から進捗確認に伴います関連発言をいただきました。時間の関係もあるのですが、少し質問も交えながら意見交換をさせていただきたいと思っています。

まず、第1点目であります入学者数の確保、大変大きな課題であります。入学者の確保に関する課題をどのように主張すればいいのか。ここは今日いらっしゃいます青陵大学、それから新潟医療福祉カレッジ、新潟医療福祉大学の3か校いらっしゃいますので、入学者確保に向けての課題と、それから行政の施策の中で反映したい、あるいは反映してほしいと考えているような意見がありましたら順次お願いいたします。

まず、青陵大学さん、いかがでしょうか。

(高橋委員)

高橋です。4年制の大学の方のソーシャルワークとか、ケアの方の学生については、順調に就職していただいている、短大の介護福祉の方が今は夏休み中も含めてなかなか外で実習ができないので、施設内の学校の中の施設をどう実習の場で、一生懸命学んでいただいている、ほぼ100パーセント県内で就職していただいているので、なんとかそれはキープしたいと考えているところです。全体的には短大の方はなかなかがんばっていて、そこが一番力になっていると私は感じていますので、なんとかそれを維持したいと思っています。

(丸田会長)

私の理解が間違っていたら失礼させていただきたいのですが、青陵大学さんから介護福祉士の養成に関するコースなり学科の定員数というものは設定があるのでしょうか。また、あるとしたならば、そこに向けての志願者数の確保、入学者数の確保というものは順調に進んでいるという理解でよろしいのでしょうか。

(高橋委員)

社会福祉学科に三つのコースがあり、福祉ワークコースと、福祉・介護ケアコース、ここが介護福祉士を中心としたコースというもののなのですが、それと子ども発達コースということで、保育者を育成するコースとありますけれどもそれぞれ層が違いますが、ソーシャルワークコースと介護ケアを考えると、まあまあ定員というか入学者というのはある程度確保されています。

(丸田会長)

うちはあとで学科長から伝えてもらいますが、新潟医療福祉大学は入学者の確保のところで大きな課題を抱えておりますので、後ほどご紹介することとして、まず山田先生、カレッジで抱えている入学者確保に向けての課題等がありましたらお願いします。

(山田委員)

課題はなんといっても学生がいないということが最大の課題です。令和3年の数は、そもそもこのデータだけで見てみると、285人中100人しかいないというところが、まずそもそも衝撃なのです。うちも来年の見込みというものが、うちのところではもう立ってしまして、来年も減ります、というような状況になっております。課題というよりは、一番ここが集まっていないと。この養成校を受けた学生が現場で結構活躍をしていて、いいポジションになって引っ張っていつていることは事実なのではないかなと思っているので、介護業界という視点で見ると、なんとか増やしていきたいなという思いはあります。

(丸田会長)

ありがとうございます。渡邊委員、お願いします。うちの大学は大きな課題がありますのでお願いします。

(渡邊委員)

新潟医療福祉大学の状況ですが、まずは学科全体としまして、正直言いますと昨年度、定員割れを起こしました。昨年度というか、この1年生になりますが大定員割れを起こしました。それが一つと、それから介護福祉コースが40人定員なのですけれども、ここ7、8年、あるいは10年近くになるかもしれませんけれども、なかなかマックスに満たないというような状況が続いています。今年の1年生について言いますと、40人中19人のコースの履修というような形になっています。ですので、全体としても、それから介護福祉士というケアワーカーの部分でも定員を満たしていないという状況が続いています。

まず一つは、それが実際の結果なのですけれども、そもそもの志願者数もなかなか増えていかなくて、若干コロナの影響ももちろんあると思うのですが、それだけを理由にはできないと思いますので、福祉の理解や、それから高校生、高校の先生方へのアプローチということで、我々の大学では事務方が当然、従来は回っているわけですが、教員も高校訪問という形で各高校を訪問しています。今年度もコロナの影響はあるのですが、ぜひ実施しようということで、一部行っていますし、これからは各高校を訪問しまして、福祉の理解、それから進路指導の先生に直接、福祉の理解をお話しさせていただいて、各高校生にぜひ志願してほしいということで、頑張っているところです。

言いたいことは、養成校、各先生方も先ほどもお話がありましたけれども、一生懸命やっているのですが、ただ養成校だけではなかなか力が及ばないところもありますので、こういった形で行政さん、福祉施設さん、それから関係機関が一体となって福祉の人材を確保していかなければいけないのではないかなと思っています。

それから、オンラインということで当然、コロナになりましたから、そういった周知と言いますか広報をやっているわけですが、対面と合わせて、こういったオンラインも十分、逆に言うと活用できるいい機会ではないかなと思いますので、そういったものも十分これからオンラインも使いながらやっていければいいかなと思っています。

それから、これも前から言っているのですが、高校生の前は当然、中学生、小学生なわけですので、中学生辺りの、少し時間はかかりますけれども、福祉の理解や魅力ややり甲斐等、これも当然、人間社会に必ず必要なものですので、そういった裾野を広げていくといった部分のことも、これからやっていかなければいけないのではないかなと思っています。

(丸田会長)

ありがとうございました。

今、ご発言いただいたように、養成校だけの努力ではなかなか将来、介護の分野で働いてくれる学生の確保のところには限界があるのではないかなという指摘がありました。その辺に

対する認識と、それから認識をお伺いできましたら、行政、あるいは事業所と一体となって取り組んでいく、施策の方向性のようなことについて、ご意見があれば若干いただきたいと思いますが、引き続き恐縮ですが、笠巻委員、いかがでしょうか。行政、養成校、事業所が一体となった将来の担い手確保に向けての施策の方向性がありましたらお願いします。

(笠巻委員)

具体的ではないのですが、結局、今、この会議の意義にも通じていると思うのですが、お互いの職域や職能の連携ということなのでしょうけれども、大きい意味で言えば。あとは今、どこの業界でも就職説明会ですとかに、OG・OBが出てきているということを見ると、そういったところからの情報共有とか、学校とのつながりというものとは絶対になくはない機会だし、あとは渡邊委員からも話がありましたけれども、採用したあとの育成の中でのメンタルサポートも含めた活動も併せて行っていないと、最近、我々であったのが相談員を目指しているけれども介護職員で入って、相談員になれなくてミスマッチで、他のところの相談員に行こうか、みたいな方で実際に辞めていかれた方もいます。あとは公務員になられた方もいるということで、せっかく入っていただいたのに、志ができないということは可哀想だなと思っているので、そのメンタルサポートや、仕事のワーキングマッチングも含めて考えていくためには、先ほどの繰り返しになりますけれども、行政や学校ともいろいろな情報の共有、個人情報の観点もあるのですが、それがまず大事だろうなど。具体的ではないのですが、そういう思いはあります。

(丸田会長)

大事なところをご指摘いただきました。国兼委員、いかがですか。

(国兼委員)

各法人さんと養成校さんとの信頼関係と言いますか、養成校の先生方が就職担当の方、あそここの法人なら大丈夫だよという言い方はおかしいのですが、大事に学んだ学生を働かせてあげたいというような信頼関係が大事と、それはすぐできるようなものではありませんので、どこの法人さんも築き上げたものとか、あるいは離職率だとか、いろいろなもので法人もがんばらなければいけないなというところで、ぜひとも各法人に対し、養成校が、この法人なら安心して学生を就職させてあげたいというような流れになればいいのかなと思います。

(丸田会長)

ありがとうございます。個人的には大変大賛成です。法人と養成校の信頼関係を太くして、その中で将来の担い手を具体的に育てていく、そういう時期にきているのかなと感じておりますが、渡邊副会長、いかがですか。

(渡邊委員)

本当に、やはり介護人材というところで、学校さんに私たちも頼るところが大きいのが正直なところだとずっと思っていたのですけれども、学校さんがそもそも定員割れを起こしている、介護の仕事に就く若い世代がなかなか減っているという現実をなんとかするためには、やはり今までの話の中にありますが、介護職の魅力や福祉の魅力、やり甲斐というところをどんどんアピールしていく必要が、事業者側としては、そこがすごく大きな役割を担っているのだなということを、改めて感じています。

先ほど笠巻委員から相談員の話がありましたけれども、うちの施設は逆で、相談員に将来になりたいと言って入ってきて、まずはいろいろな職種の勉強もしなければいけないし、高齢者を知らなければいけないので、まずは介護の現場から介護を知ってもらって、それから相談員にという形をとっているのですけれども、今逆で、そろそろ相談員でいいではないかと若い世代に声をかけると、「もうしばらく介護職をやらせてください」という人がほとんどなのです。なので、面白い現象だなと思いながら聞いておりました。みんな相談員を目指してやってほしいのですけれども、なかなかそこがちょっと。介護職のほうが魅力があるみたいで、少し残念なところですが、いずれはみんなにそんなこと言わないでやってもらおうと思っております。なので、事業所側の役割としては、やはり福祉の魅力、介護職の魅力というところをとにかく出していかなければいけないかなと、非常に今、感じております。

(丸田会長)

ありがとうございました。今、ご指摘いただいたところは障がい福祉の分野でも同じような傾向が起こっております、現場で働いている若い人材の将来のキャリア形成に向けた取り組みをどう進めていけばいいかということは、やはり課題になりつつあるのかなと思っておりますが、一方的に進めていますが、笠巻委員、私からの質問です。老施協においても働いている職員に対する研修体制については、ご苦勞いただいているかと思いますが、それこそ人材の育成ビジョンのようなものを老施協としてお持ちのようでしたら、少しご披露いただけませんか。そろそろやはりどう人材を育成していくかというビジョンがあって、



そのビジョンに基づいた具体的な取り組みを展開していく必要があるのだらうと思いますが、その辺の視点で、少し皆さんにご紹介いただけるものがあればお願いします。

(笠巻委員)

柱としては二つがあるのです。人材を確保することが一つ、それからもう一つが、今おっしゃられました人材を育てるということ。育てるということが結局、離職防止にもつながっていくということの二つの柱をやっぺいこうということで、時節に合ったような研修を心掛けていたり、魅力の発信というものを、我々の団体としてはしようというふうにはしていますし、あとは講師の斡旋や紹介なんかもしても構わないよねという話はしております。

今年で言えば、研修はほぼウェブ、大会のウェブなのですが、各団体、ケアマネ協会ですとか、介護福祉士会、あるいは弁護士や医師会にも頼んで講義をしてもらうとか、あとは老施協内では最近話題になっているアンガーマネジメントですとか、そういったことの周知になるような話題を提供していこうと。あとは広報紙を出しているのて、そういったところで情報発信というふうにはやっぺいこうと考えています。

(丸田会長)

ありがとうございます。

ここで一回、行政に戻したいのですが、ここまで私どもの委員間のやり取りをお聞きいただいて、行政の方でコメントなりありましたらお願いいたします。

(事務局)

魅力発信の部分でお話しさせていただくと、市では医療と介護の出前スクールということで、小・中学生など主に若い世代に向けて、事業所の皆様にもご協力いただきながら魅力発信をさせていただいております。終わった後、生徒から感想をいただくことがあるのですが、その出前講座を受ける前と後では、自分が思っていた介護職のイメージと違ったとか、すごい仕事だということが分かったとか、そういう感想をいただくことが多いので、介護の仕事イメージ的に大変そうだなと思っている子どもたちに向けて魅力発信をしていくことは大切なことだと感じています。あとは5月に新潟医療福祉大学さんにお誘いいただいて、求人説明会を見学させていただきました。コロナ禍での準備等、大変ご苦勞をされたと思いますが、やはり学生さんと事業者さんで直接話ができる機会があるといいと思いますし、就職した後、最初は介護職員として、そのあと相談員としてというようなキャリア形成についても、学生さんと事業者さんが話をする中で、考えることができる機会があるといいのか

など感じています。

(丸田会長)

ありがとうございました。

時間の関係もあるのですが、魅力発信あるいは情報発信の件については、笠巻委員からも、それから国兼委員からもご指摘がありましたので、人材確保について、入学者の確保については一通り意見を伺いました。

次に、若干時間を取らせていただいて、中学生、高校生、あるいは大学生、さらには社会人の方々に、どのように発信をしていくのか、その辺のことについてご意見がありましたら改めてお聞かせいただきたいと思いますので、また順番によろしいでしょうか。まず、渡邊弘子委員、いかがですか。

(渡邊委員)

どういう方法があるのですかね。前に急きょ、どちらの法人さんか分からないのですけれども、出前講座で中学校に行かせていただいて、行っていただいた職員から聞いてみたら、あのときは保健師さんではないし、薬剤師さんでしたっけ、そういう職種の人も一緒だったということ。

(事務局)

そうです。

(渡邊委員)

薬剤師だったか、やはりテレビの影響は非常に大きいのかなということは思いました。そこは非常に感じました。何らかの形で介護の魅力というか、この面白さを伝えたいと思うのだけれども、その手段ですよ。何がいいのだろうといつも悩んでいるところです。

(丸田会長)

渡邊敏文委員、いかがですか。

(渡邊委員)

この事業とは違うのですが、県の事業で、学生たちの意見というか考え方を整理した機会がありました。その中で見えてきたのが、一言で言うと就職する学生たちが自分たち

のライフと言いますか、人生が描けるような、夢が描けるような就職先というものを目指しているということがよく分かりました。

例えば、入り口の部分では給料だとか、先ほどもありましたけれども、イメージで入職していくのですけれども、結婚して子どもが生まれると、今度は休みが取れるということが優先順位が高くなっていくのです。それから、その子どもが育って行って学校に入るという頃になると、やはり一定の給料が欲しいということがいちばんの目的になっていくのです。年齢がどんどん進んでいくと、地域貢献ができる法人がいいと。要は年齢層によって求めるものが違うのです。ですので、受け入れる側としては、やはりトータルとして魅力ある職場と言いますか、入ってくる人が自分の人生設計が描けるような魅力ある法人と言いますか、なかなか口で言うのは簡単なのですが実際は難しいとは思いますが、そういったトータルとしての夢が描けるような採用等、それから送り出す側の学生たちが夢が描けるような送り出し方、そんなところがあればいいのかなと思っています。

(丸田会長)

ありがとうございました。山田委員、お願いします。

(山田委員)

前の会議でもチラッと行ったような気がするのですが、今はやはり養成校に学生が集まらないということが一つ。小・中までは結構、介護の人気はあるのですが、高校になるとそんなになくなって、私も高校の先生と話すとき、「私は薦めませんから」とはっきり言われる先生も結構、現実的にはいらっしゃっていて、高校の先生の影響はやはり大きいと思うので、この前、オープンキャンパスに来た学生も「高校の先生に否定されました。でも私はやりたいのです」と言って来たのですが、高校の先生の方を変えていく機会があるといいのだろうかということは、つくづく思っているところです。

(丸田会長)

大事なところをいただいたと思っています。論は皆さん議論ができるのですが、では実際に高校教育の現場にどういふふうアプローチをしていくのか、もっと言えば県の高等学校教育課と意見交換をするとか、そういう具体的なレベルのところではなかなか議論がいかなくて、いつも総論で終わって、あるいは方向性で終わっているところに多少、忸怩たるものを感じておりますので、じゃあどこから取り組んでいくかというようなことを、そろそろ検討したいなと思いますが、ありがとうございました。高橋委員、いかがでしょうか。

(高橋委員)

私も今ほどお話のありました、山田委員のお話のとおり、私も社会福祉協議会の時代に結構、学校訪問や総合学習に出向いた際にお聞きしたのですが、やはり小・中、高校もそうですが、やはり先生自体が薦めないということが一番ネックになっているなど思っています。

そういった中では、学校の先生、小・中・高校の先生と、もう一つは、そこから埋まらなければ父兄、母親とかPTAとか、いろいろなところに対するアプローチで、これは子どもの目線での話というよりも、やはりこれから超高齢化社会を迎える中で、やはり介護力というものがどんどん減っていく。どうしても必要な職種なわけですので、その辺を訴えていくことが、子どもたちだけではなくて、外堀を埋めるというか、その辺の施策というものに力が入っていないのかなということが一つ。

それと、もう一つは、昔から言われていることですが、やはりステータスとして看護師さんという地域の中でスペシャリストというか、それなりの評価を得られるのですが、ヘルパーさんとか介護と言われると、それほどではない。ここをなんとか上げたい。それを上げない限り、子どもたちも誇りを持った仕事としてもっていくことがなかなか難しいのかなという感じで、これは多分、学校も含めて、ステータスや、いわゆる社会的地位を上げるということの取り組みを一つやるのが大事で、また魅力的なキャンペーンをするとか、これは今、企業さんもいろいろチームエコや自然環境の保護とかというものをやっていますので、ひとつそういったところに力を入れていきますと、24時間テレビというわけではなくて、そういったものも行政としてどんどんやって、これは新潟市のみならず県も含めて、国も含めてということになっていただくと、やはり社会的地位の向上に向けてアプローチしていく必要があるなど思っています。

(丸田会長)

ありがとうございました。このあと国兼委員、笠巻委員からご発言いただきますが、冒頭、問題提起をいただきましたので、ご自身が問題提起をされたことを期待して、どのような施策の方向性なり、具体的な取り組みが有効であるかという辺りについて、ぜひストレートな意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。まず国兼委員、お願いします。

(国兼委員)

まず、ワーク・ライフ・バランスでしょうか。就職したら本当に長く働ける、賃金もこれだけもらえる、研修もこれだけあるということで、安心して長く定年まで勤められるのだよ

というようなことと、あとは先輩の話も聞いてもらおうと。いいところばかりではない、悩むときは当然悩むのだけれども、一人で抱えないで、みんなで共有していこうというような雰囲気といいますか、そういうものを発信していければなど。実際、発信しているのですけれども、要するにワーク・ライフ・バランス、賃金、働きやすさ、心地よさというような、その辺を私ども柱にして発信しているところで、なかなか介護協会だけではなくて、いろいろな職種、いろいろな仕事があるので、呼んでいただければ、どこの学校でも行っていますけれども、近いところでは職員、家族、子どもさんだとか、その辺に、介護っていいんだよ、お母さんはいい仕事しているね、お父さんはいい仕事しているね、お姉ちゃん、お兄ちゃんはいいい仕事しているねと、そんなところでつなげていって、今、述べたような、長く、大事に育てますよというようなアピールができればなどと思っています。

(丸田会長)

ありがとうございました。具体の意見をいただきました。最後になりましたが、笠巻委員、お願いします。

(笠巻委員)

法人としては、就職説明会等の内容が少し変わってきて、先ほど渡邊先生からもお話しありましたがけれども、将来が見えるということが大事だと思うので、単純に条件だけではなくて、先ほど言った20代後半から30代で結婚して家建てて云々ということで、ただ給与の額だけではなくて、それがどんなふうになっていくかとか、そういったことも少し説明を付け加えるようにはしています。

それから、先ほど来の高校の先生についても、実は当法人は高卒についてはほとんど採用実績がないのですけれども、数名はあるのですが、今のところは積極的には採用していません。ただ高校生の就職説明会のご案内はします。そこには参加はしているのです。それは先生にお話をしているのです。ぜひ福祉を志していただきたいということで、先生のために行っているような感じで、それも一つは裾野を広げることにはつながるのかなという感じがしていますので、そんな動きをしているというところでしょうか。そんな感じです。

(丸田会長)

ありがとうございました。予定している時間を少し超えているかもしれませんが、大事なところですから意見交換をさせていただきました。

私のほうから不確かな情報なのですが、事務局に多少のお願いがあります。と言いますの

は、前回、国の労働局の職員のかたと意見交換をする機会がありました。場面は、新潟市における「まち・ひと・しごと創生会議」の場面でした。その際に、本当に目の前のことなのですが、このコロナの影響を受けて、高校生が就職に向けての高卒での就職を手控えていると。この先、社会がどのように変わっていくのだろうかということ踏まえながら、高卒の段階で就職をしないで、専門学校なり大学で一定の期間、経過を踏まえた上で次の進路を考えたいという考え方が、どうも高校生や家族の中に働いているようだ。データとしては、高校卒で就職を希望する者が、たしか前年の3割くらい減少しているという指摘をいただきました。かなり重要なデータなのかなと思うのです。就職を手控えて専門学校なり大学で、しばらく様子を見たいというかたが前年度、簡単に言うと高卒での就職希望者が前年の3割減であると。ここのターゲットに対して、どのような情報発信をしていくのかということは、もしかするとあまりにも短期的なとか、目の前の事柄のように思いますが、でもコロナの収束後のことを考えると、今、この時期に中学生、高校生、それから先ほどお話がありました保護者の方々、そして高等学校の先生方に、どのような発信をしていくのか、ここをやはり議論をしてもいいのかなと思うのですが、事務局いかがですか。確認をした上で次に移りたいと思います。

(事務局)

正直、具体的な案というものは今、出てこないところではあるのですが、ただ丸田先生におっしゃっていただいたように、高卒で就職する予定だった人が3割減少したということだと、その分、専門学校ですとか大学に進むことを希望する子が増えるということだと思うので、うまくアプローチできれば介護福祉士養成校への入学者数を増やすことができるのかなということはあるのですが、ただ今、具体的なものは出てこないで、今後検討させていただきます。

(丸田会長)

今日は話題を提供したままでありますので、会議が終わってからも、また少しガイダンスしていこうと思っています。

時間が押しておりますが、もう一つ、表彰の件が残っておりますので、引き続き学生表彰について、事務局から簡潔にご説明をいただきたいと思います。

(事務局)

事務局より議事2説明

(丸田会長)

ありがとうございました。このあとは特に指名いたしませんので、ただいま説明いただきました内容について、修正、意見、あるいは新たに追加をしたい提案などがありましたら、ぜひご意見をいただきたいと思います。どなたからでもお願いします。いかがでしょうか。

私から提案があるのですが、実際に実施が可能かどうかは、またぜひ判定いただくこととして、笠巻委員、あるいは国兼委員へのストレートな質問になります。このコロナの影響下の中であって、今年の4月、令和4年4月に養成校を卒業して介護の現場に就職をし、そして大変ストレスが高い状況の中で、先ほど渡邊委員からもお話がありましたが、大変強いストレスを感じずらな現場において介護の仕事と向き合っている若い人を、ぜひ現場と私どもの方で相談させていただいて、この1年間がんばっていただいている若い人を表彰対象の中に加えるようなものの考え方はいかがでしょうかという、新たな提案なのですが、というのも本来、この事業がスムーズに動いていれば、令和3年2月か3月に表彰するということもあり得たのではなかったか、計画上は。

(事務局)

昨年の協議会の段階で表彰という話は出させていただいていたかと思うのですが、ただ、その段階ですと対象事業者の皆さんにお願いするですとか、その辺は少し流動的なものがあって、去年はコロナ禍ということで、事業所の皆さんはなかなか通常の業務が大変な中で、ご協力いただくことが難しいかなというところで、市の方でも再度、検討させていただいた結果、今年度については、こういう形でご提案させていただいたということにはなりません。

(丸田会長)

そうしたいということではなくて、そういう発想をしてみたのですが、ご意見いただければと思いますが、笠巻委員、いかがなものでしょうか。もっと言うと、例えば養成校を出て、新潟南福祉会で一生懸命がんばってくれている若い方、例えば経験が3年以内のがんばっている若い職員を市長さんの名前で、よくがんばっているねということで、感謝の意を伝えるようなこともあってもいいのかなと思っているのですが、いかがでしょうか。

(笠巻委員)

現場における新人賞みたいなものではないかな。

(丸田会長)

そうですね。

(笠巻委員)

そんな感じになるのでしょうかね。イメージとしては。

市の協力がどこまでかは別として、OG、OBが一つの背中を見せることや、目標になっていただくという意味合いでいくと、私は大賛成ですね。どういう表彰の仕方、選出の仕方は別として、これから内定していく人だけではなくて、併せて表彰されたニューフェイスの方々の賞もあって、私はいいような気がします。

(丸田会長)

国兼委員、私の提案を押しつける気はまったくありませんので、どうぞお願いします。

(国兼委員)

基本的には賛成です。私どもも入社1年目、2年目のフォロー研修というところで表彰も法人内でしていますので、やはりそれを見ている職員の励みになっているのは事実でございますので、それがもっと外へ出るというところは非常に介護業界で働いている人も養成校にも意義があるのではないかなというような気がいたします。

(丸田会長)

あくまでも私の養成校の教員としての提案だけですので、提案にとどめさせていただいて、そこまでにしたいと思いますが、ほかの委員の方々どうぞ。今回、事務局から提案がありました学生表彰に関する実施方法、あるいはスケジュールについてご意見がありましたらお願いいたします。高橋委員、お願いします。

(高橋委員)

私も表彰の事業については、文句を言うことはないのですが、今、もっとこれから就職をしよう、働こうという子よりも、まだ3年以内くらいでも、のんびりとした、施設の皆さんには大変ご苦勞をかけることになってしまうかもしれませんけれども、本当にがんばっていて、入ったばかりの子どもたちを表彰するということがあれば、例えば1年以上3年未満とか、そういう形でやれば、それこそ励みになるし、その方がいいのかなというふうに思います。



施設で各学校、出身校別に推薦を施設の方に挙げてもらうとかという形になると、一番いいのかなと思います。

(丸田会長)

なるほど。ありがとうございました。ほかの委員の方々、いかがでしょうか。

(渡邊委員)

今回、SNSやブログのところにも情報を発信するということがありましたけれども、我々の本来の目的である事業所と養成校の一体感や、行政も含めてですけれども、そういったものを事業所の職員の方にも見ていただけるような機会や、それが委員長おっしゃったような新任の職員の表彰等にもつながると一つの流れができるのではないかなと思うので、ぜひ会長がご提案いただいた部分や、発信先も養成校だけではなくて、事業所や法人さん、どの程度受け入れていただけるかは分かりませんが、そういったところにも発信するのもお互いの励みや、これからの人材の裾野の広さという意味では効果があるのかなと思います。

(丸田会長)

ほかにありませんか。山田委員、お願いします。

(山田委員)

私も渡邊委員と同じ意見なのですけれども、この事業概要の目的が、若い世代の介護への関心を高めることに加え、在学生のモチベーションを上げるということなので、特に若い世代の介護の関心を高めるところがポイントだと思います。先ほど国兼委員の話にもあったように、表彰しているところをみんなが見ていて「私も」というふうに思ったという、そのとおりであって、表彰というものは見ている人がいて、ああなって良かったのだとなるからこそ、いいだけであって、誰も見ていなかったら意味がない話になってしまうので、これがプレスリリースだけで本当にいいのですかというところが。目的に対してプレスリリースだけでいいのですかというところと、先ほど言ったように、例えば高校に、こういうものがありますよとか、それこそ会長が言われたように、1年目の新人賞みたいな人が入った方が、そういうことであれば、よりいいと思うのですけれども、高校等にもピラを作って持ってもらうことや、一般市民にも「こういうものがありますよ」と市報に載せる等、高校生にも、こういうものを表彰するから、見ることをしないと意味がないなど。意味がないと言

ったら失礼ですけれども、目的と合っていないというか、そういう気がしました。

(丸田会長)

これも重要なところをご指摘いただきました。一回、私の提案に対するコメントは要らないのですが、事務局いかがですか。今ほど山田委員からご指摘があった、表彰について、どのように広く中学生、高校生、市民の方々から喜んで拍手を送っていただくような、そういう調べについてのお考えがありますでしょうか。

(事務局)

やはり山田先生のおっしゃるとおりで、内々で表彰式だけやっても何の魅力発信にもならないと思うので、事務局としても、できる限り多くの方に見ていただきたいなとは思っているところではあるのですが、やはりコロナ禍であるので、大きい会場に皆さんに集まっていたらということが難しい状況ではあるので、事務局としても、できれば今の案としてはズームでつないででしたり、Y o u T u b e の配信等で、いろいろな方に見ていただけるような体制にはしたいなとは考えているところではあるのですが、ただたしかに高校でしたり、そこまで考えが及んでいなかったところはあるので、どのあたりまで事業の開催を周知するのか、どのあたりの関係機関の皆様に見ていただくかとか、そのあたりもぜひ検討させていただきたいなと思います。

(丸田会長)

他の委員の方々、いかがですか。もう5分程度で終了にしたいと思いますが、お願いします。渡邊弘子委員。

(渡邊委員)

手は挙がっていないのですが、すごく非常に大賛成です。やはり若い世代ががんばっているところも新潟市の方から表彰してもらえたら、これはものすごくいいと思います。アピールになると思いますし、私はいつもドラマか何かで言っているのですが、これがそれこそテレビなんかが入ってくると、非常に憧れるのではないのでしょうか。学生さんも若い子たちも、次は自分もあの場で表彰されたい、なんていうふうになったら魅力発信につながると思いますので、大賛成です。

(丸田会長)

私からも一つ問題提起しますと、本来、このような議論というものは、新潟県と新潟市が一緒に取り組んでいる何万人となく来場される福祉・介護フェアの中で、人材確保、人材育成をどう進めていくのか、それに対する本気度を県民なり市民の方にアピールしていく大事な方法として、やはり介護の現場で汗をかいていただいている方々を知事さんなり市長さんが、堂々と社会の前に出て表彰していく。もっと言うと感謝をしていく、そういう施策に展開しなければいけないのではないかとということが、実は私の持論であります。なかなかそれが前に進まない。前に進んでいきません、残念ながら。そうすると、せっかくこのようなシステムを作っていただいたものでも、ほかの人がしないのであれば、ここの仕組みの中で、きちんとやってもいいのではないかと、少し短期な提案でした。以上です。何かありましたら、お願いします。渡邊敏文先生、いかがですか。県の福祉介護人材の仕事もしていただいておりますので。

(渡邊委員)

怒られるかもしれないけれども、県の会議なんかは特にそうなのですけれども、大きな空想というと怒られるのですけれども、今回出たような具体的な、やれることを進めていくという意味でも、やはり大事なことかなと思います。

(丸田会長)

事務局、どうでしょうか。課長さんにコメントを今日は求めないほうがよさそうですね。コメントを求めてしまうと何か方向性が。もしコメントがあれば。

(高齢者支援課長)

本当に今日、具体的にいろいろなご提案をいただきました。いくつか感想もあるのですけれども、お話しさせていただきたいです。

養成校に入学するですとか、介護業界に就職するといったところは、やはり親御さんだとか、先生方の影響が非常に大きいなと思っています。そういったところで、高橋先生もおっしゃっていましたが、社会的地位の向上が、やはりそこをなんとかしていかなければいけないのかなと思っています。

やはり働くにあたっては、キャリア設計がきちんと見通せるというものが必要かなと思っています。そういったところを皆さんと一緒に具体的な細かいピンポイントの施策を、どのように打っていけばいいのかといったところもあるのですけれども、魅力発信というものは、

今やっているものが先の長い投資になるのですけれども、そういった地道なことをやりつつ、今日お話しいただいた中でピンポイントで即効性のあるものが何かあるのかといったところが、まだ思い描けないのですけれども、そうったところを考えていきたいと思っています。

丸田先生が最後におっしゃっていた、福祉・介護フェアでの表彰なんかは、コロナが収束したあとに本当に実現できればアピールになるかなと思っています。まず、コロナが収束しないうちは、言い方は悪いのですけれども、なかなか派手なことができないので、地道にやれることを一緒に考えていきながら実行していければなと考えています。

とりとめのない感想的なものですが、コメントは以上です。

(丸田会長)

では、お約束の時間が来ましたので、委員の方々、どうしてもというかたはいらっしゃいますか。特にご発言がないようであれば、本日の議事はここまでで終了させていただいて、事務局にお返しいたします。事務局、お願いします。

(司 会)

皆様、長時間にわたり、ありがとうございました。会長もありがとうございました。

本日、介護人材につきましては、具体的に職員の地位向上であるとか、また、教育現場への特に高校教育現場へのアプローチなど、具体的なキーワードとなるものをいただきましたので、今後の事務局の事業展開の参考にさせていただきたいと思っております。

次回の開催につきましては、年明けの表彰事業の前を予定しております。いつというお話は具体的にできないので大変恐縮なのですが、年明け、表彰事業の前を予定しておりますので、また日程調整のご連絡を改めてさせていただきたいと思います。

以上で、閉会とさせていただきます。皆様、お疲れさまでした。本日は、ありがとうございました。

#### 4 閉会

#### 5 配布資料

- 資料 1-1 新潟市介護人材確保対策協議会について
- 資料 1-2 令和3年度委員名簿
- 資料 1-3 新潟市介護人材確保対策協議会開催要綱

- 資料 2-1 介護福祉士養成校入学者数調査
- 資料 2-2 介護人材関係機関における事業（取り組み）と目標
- 資料 3 介護福祉士養成校学生表彰事業の実施について（案）
- 参考資料 新潟市介護人材確保戦略